

シリーズ  
いのちを守る

ヒポクラテスの末裔たち

ジャーナリスト  
立木寛子

利尻島国保中央  
病院の試み

# 離島で最新医療 に取組み



写真・秋元良平

同じ僻地でも、陸続きの山間地と異なり、状況次第では陸との交通が完全に遮断されることにもなるのが離島。その閉塞の恐怖感は体験したものでなければわからないという。天候の悪化で、海路も空路も閉ざされ、必要な薬品が足りなくなつたら……。患者を専門医のいる病院に搬送しなくてはならないことになつたら……。常にこうした緊急事態を念頭に置きながら日々の診療に当たっているのが、離島に働く医師たちだ。北端の地、北海道・利尻島の利尻島国保中央病院は、そんな離島医療の難しさを克服、僻地医療のモデル的ケースとして注目されている。

(敬称略)

## 二年ローテーションシステム

「毎日が全力疾走。次にやってくる後輩に上手にバトンタッチできるまで、倒れることはできない」

利尻島国保中央病院・院長の大西浩平(二三歳)は、ゴールまであと約半年といういま、この思いがますます強くなっている。平成十二年、二〇〇〇年という大きな区切りの年の五月、二年間の院長任期を終えて島を去ることになっていく。

同病院は、同島の二つの町、利尻町と利尻富士町の共同出資による一部事務組合立病院として、昭和六十年に利尻町に開院した。広域医療システムとして北海道で初めての試みだった。以来、十四年間にわたり、自治医科大学卒業の医師が二年間交代で診療に当たっている。

平成三年に自治医科大学を卒業した大西は、旭川医科大学第三内科に入局後、旭川市内の病院で研修を積み、市立稚内病院・内科に勤務。平成六年、内科医長として利尻島国保中央病院に

赴任した。二年後に旭川医科大学に戻り、さらに二年後、利尻島国保中央病院に院長として帰ってきた。二年ごとに変わる職場環境は、北海道出身の自治医科大学卒業生独特のものだ。

昭和四十七年に、僻地の医師不足を解消しようと全国の自治体が共同で設立した自治医科大学の第一期生が初めて利尻島に派遣されたのは昭和五十六年。北海道の地域医療政策に基づいての派遣だった。六十年に現在の病院になり、常駐の医師も二人から四人へと増員されていった。この過程で二年間のローテーション派遣が確立。偶数期の卒業生は利尻島での勤務が暗黙の了解ごととされている。内科医は、最初の勤務が終わった二年後に、今度は院長として二度目の勤務をすることも、伝統的な決まりごととして継承されている。

第十四期生の大西は入学した直後、そのシステムを知った。そのときから利尻島が大きな存在となった。